

Title	墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動： 奈良在地産石材の消長と南山城における墓標の地域的差異
Sub Title	An investigation into quarrying activities of the early Edo period based on the archeological evidence of gravestones
Author	朽木, 量(Kutsuki, Ryo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2000
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.69, No.3/4 (2000. 5) ,p.259(591)- 282(614)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000500-0259

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動

—奈良在地産石材の消長と南山城における墓標の地域的差異—

朽木量

目次

問題の所在

問題の所在

- I 民俗学・石造美術史・文献史学における近世石工の研究
 - (1) 「渡りの石工」と「村の石工」
 - (2) 奈良における近世石工研究
- II 木津地域周辺の鉄石製墓標の消長
 - (1) 木津郷にみられる墓標型式と石材の分類
 - (2) 木津郷周辺の墓標から見た鉄石使用の地域的傾向
- III 鉄石採石の歴史的背景
 - 結語

の衰退により、全国的な石材流通に支えられた石工が近世中期以降に出現したと考えられている。しかしながら在地での採石活動は、個別の地域毎の様々な歴史的背景を伴つて成立しており、それらを無視して時間的な前後関係だけで、全国一律に在地での採石活動の衰退と、全国的な石材流通の展開を関連づけて論することは出来ない。在地での採石活動の消長を、それぞれの地域のなかで詳細に検討することが重要である。その一方で、近世前期の文献史料が比較的乏しく、石工銘や年号を記した紀年銘をもつ資料が限られることなどから、在地での採石活動の消長については不明のまま残されており、文献史料を補完すべき他の研究手法による究明が望まれる。

そこで本稿では在地産石材を用いた墓標に注目したい。墓標は他の石造物に比べ紀年銘を有することが多く、かつ量的にも豊富である。墓標の年代的な変遷を量的に把握することから、在地での採石活動の消長を明らかにすることが可能である。その上で文献史料が示唆する採石活動の歴史的背景と、墓標の考古学的分析によつて認められた在地産石材の使用量、及び使用頻度の年次的変遷との照合を行ない、在地での墓標造立活動の復元と、採石活動についての推察を試みたい。本稿で対象とするの

は、近世墓標の考古学的研究が古くから進展し、量的にも地域全体の把握が可能である山城国木津郷周辺である。当該地域の在地産の石材としては、隣接する加茂地域で産出する花崗岩と、奈良春日山周辺で産出する輝石安山岩（鉄石・カナンボイシ）が挙げられる。ここでは主に中世末から近世前期に最も多用された鉄石の消長とそれに基づく南山城地域の村落毎の墓標造立活動を明らかにしたい。

I 民俗学・石造美術史・文献史学における近世石工の研究

(1) 「渡りの石工」と「村の石工」

近世の石工については、石造物を生産しては移動する「渡りの石工」と、定住した村の石造物を恒常的に生産する「村の石工」が考えられており、その両者を中心にして研究が展開してきている。柳田国男は『明治大正史世相篇』のなかで、「石屋」は元来「渡り職人」であつて、「江戸期に入つてから地方に土着し始めたのが金屋であつたが、それでも其一部だけは今も尚巡業を本則としている。石屋はそれから以後に少しづゝ、村を作り始めたが、まだ完全に土地に居馴染んだとも言へぬものが多

い」と述べ、石工は本質的に「渡り」であり、一部の石工が地方で定住化したと言及した（柳田一九六三）。この影響をうけた以後の近世石工研究も、本質的とされた「渡りの石工」を中心進展している。その多くは、石造物に記された銘文を中心に石工の活動範囲を復元したものや、特定の石工（守屋貞治・石工太良兵衛など）に関連する文書に基づいてその活動を論述したものである。全てについて言及することはしないが、特に高遠・和泉の石工に関する研究が多い（曾根原一九六九、北原一九九五等）。中でも金森敦子は、職人史研究の立場から「渡りの石工」に数多く言及している（金森一九七八、一九八〇、一九八二）。金森は、石工の「渡り」を、一人前の職人になるための「旅修業」と捉え、主な活動時期を「江戸中期から後期にかけて、全国的にみても石工の移動は多かった」とする。近世墓標の研究において、こうした「渡り」を初めとする石工の習俗を視野にいれることは重要である。研究例としては、三好義三による「非塔形墓標」（本稿では後述するB型墓標に相当）の全国的な普及を考える際に、和泉石工の出稼ぎの事例を用いた考察（三好一九九〇）が挙げられよう。

一方、柳田が指摘したように、「渡りの石工」が地方

村落に定住化し、「村の石工」となる例もあった。大護八郎は、「大きな組織の上に乗った棟梁とその下で働く石切、石工、農閑期に各地を廻って需要に応ずる出稼ぎ石工とは別に、地方に定住して石材の入手、施工、販売まで家内労働力で間に合わせるいわゆる石屋は、近世以降数を増し、それがまた村々の墓石や石仏造立の中心になつたことが考えられる」とし、近世石工の中で「村の石工」の重要性について指摘している（大護一九七八）。この「村の石工」の出自と成立の背景について、木村博士は近世初期各地での築城による「石垣ブーム」に動員された者が、やがて村や都市に定着してゆく過程において「墓標製作等に従事したものとしている（木村一九七六）。また、遠藤元男は採石地周辺に石工が集住していたことを指摘し、それを「村の職人」とした（遠藤一九八五）。一方、近くに採石地を持たない多くの地方村落における「村の石工」の出現時期については、それを裏付ける文献史料がほとんどない。都市部の石工と異なり、石造品の需要の少ない村落部の石工は半農半工の状態であり、村方の書上帳などにも石工でなく農民として記載されていたと考えられるためである。金森敦子は、史料不足の状況の中でも石工の屋号に注目し、石材供給地である和泉

地方の地域史も考慮しながら和泉石工の他地域への移住時期を明和期（一七六四～七二）以降としている（金森一九八〇）。また、西川武臣は幕末期武藏国鶴見村における地方文書の記述から「村の石工」の出現時期を近世後期から幕末としている（西川一九九三）。さらに、萱野章宏は袖ヶ浦市内の石工銘を持つ石造物を集成した上で、当該地域における石工の営業圏を復元し、江戸や中継地である木更津を含めた形での石造物流通が発達した過程を三期にわけて論じている（萱野一九九七）。和泉や鶴見、袖ヶ浦の事例だけをもつて、「村の石工」の出現期を全国的に普遍化することは出来ないが、採石地周辺に住む石工については中世以前に系譜を持つものも多いことをふまえると、近世中・後期以降、採石地周辺以外の地方の村落にも徐々に定住化した石工が出現してきたと考えられる。

この「渡りの石工」と「村の石工」の両者を支えていたのが、全国的な石材流通であろう。とくに「村の石工」は、江戸・大坂といった都市部における石問屋・石仲買人から石を購入し、周辺農村に売り捌いていたことが指摘されている（西川一九九三）。「渡りの石工」もその移動と共に石材も運んだと言われており、全国的な石

材流通抜きには語れない。筆者は別稿（朽木一九九四）で、近世中期以降の淀川・木津川流域において、石材流通制度の発達に伴い特定の石材が大量に出現していくことを指摘した。同様に、秋池武は群馬県に産する牛伏砂岩製墓標の分布に注目し、在地産の石材とそれに関わる石工が近世中期以降に中仙道を通じて流入する諸石材に置換わる様子を論じている（秋池一九八九）。

このように、在地産の石材の衰退には石材流通によつて大量に搬入された石材が影響していたと考えられ、在地産の石材に関わった石工も同様に衰退したと考えられる。冒頭で述べたように、在地産石材の採石活動の消長を明らかにすることは、「渡りの石工」や「村の石工」といった近世的な石工の出現の背景を明らかにすることになる。在地での採石活動の消長を各地域毎に見ていくことが、近世石工研究の上で不可欠であるといえよう。

（2）奈良における近世石工研究

本稿で取り扱う山城国木津郷周辺の墓標製作に従事したと考えられる、奈良の石工の研究史について、以下に触れておきたい。奈良における近世石工の研究の中で仲芳人の業績は卓越している。仲は石造品に残されている

石工銘文をもとに、数多くの近世石工の活動を復元している（仲一九八八、一九八九a、一九八九b、一九九〇a、一九九〇b、一九九六）。さらに、仲は「戦国時代に消失した東大寺大仏殿が宝永年間に再建され、その後に春日大社参道の石燈籠群の造立が始まり、奈良の街に石工が集まり始まる。そして十九世紀になり人口がふえて石造物の需要の増加が加わり、石材加工業も大きく発展し旧大和国の石材加工業は地域経済を支える大きな産業だった」という私見を述べている（仲一九八九b）。

十九世紀奈良の寺林町一帯の「和泉屋」を名乗る石工の隆盛に関する指摘は確かに卓見であるものの、大和の石工が宝永年間以降に始まるという指摘については、中世末の奈良における石造物から明かにしうる実態と符合しない。仲は近世大和の石造物最古銘資料である元禄二（一六八九）年銘の資料以降の紀年銘を有する資料を用いている。しかし、その資料の殆どは花崗岩製の大型石造物に限られている。後に詳述するが、石材と、石工及びその採石活動は密接に関係していると考えられ、中世末に流行する在地産の石材である鉄石（輝石安山岩）製の石造物の検討がなされていないことから生じる資料上の時期的・質的偏りを考慮すべきである。即ち、元禄

二（一六八九）年銘の資料は、その時点において表記の石工が居たことを示すのみであつて、それ以前に石工が存在しないこと、或いは石工の活動が消極的であつたとの証左とはならない。また東大寺大仏殿の再建についても、その事業規模を考えると各地から多くの石工が動員されてしかるべきであり、大仏殿再建以前の奈良における石工の活動とは別次元の問題である。大仏殿再建を奈良の石工が増加する一因として捉えるのはよいが、それをもって奈良の石工の濫觴とすることは出来ない。

『多聞院日記』には大和郡山城築城の際に春日山周辺から石を持出した旨の記述が見られ⁽¹⁾、中世末にすでに鉄石と思われる石材の採石活動や石工に関する記述が散見される。また考古学的には、元興寺極楽坊に中世末から近世前期にかけての在地産の石材である鉄石（輝石安山岩）製墓標が一千余基以上存在する（木下一九七七）ことが知られている。仲芳人はこれらの鉄石製小石造物と石工の関係を具体的に論ずるべきである。

以上のことを考え合わせると、中世末から近世前期に鉄石を扱う石工集団が存在したことは疑い得ない。したがつて十分な量を持って中世末から存在する資料である墓標を取り上げれば、当時の石工の活動が復元できる。

この点で、木下蜜運は木津惣墓・元興寺極楽坊の墓標が共に同時期に同一の若草・御蓋山（図1）系統の鉄石（輝石安山岩）を用いていることを指摘し、墓標から「中世後期から近世初頭にかけての採石場や石工、ひいては当時の文化圈を考え」られることを示唆している（木下一九七七）。本稿では、墓標から石工活動を復元するというこの着眼点を踏襲したい。以下、墓標という物的資料から在地産石材の採石活動を量的・時間的に把握し、その上で南山城地域における墓標造立活動の実態を具体的に検討する。

II 木津地域周辺の鉄石製墓標の消長

（1）木津郷にみられる墓標型式と石材の分類

ここで分析対象とする地域は、京都府の南山城地域の南半部で（図1）、木津川の氾濫原である木津河谷低地を中心には、南部に広がる奈良丘陵の末端迄を含む。現在の行政区画では山城町・木津町・加茂町の一部に相当する。近世の当該地域は木津川水運の河岸として発達したばかりでなく、京都と奈良を結ぶ奈良街道（西京街道）沿いの村として繁栄してきた。当該地域では複数の村が連合して、郷と呼ばれる組織を形成しており、墓地の運

営方法も郷単位で行う場合と村単位で行う場合がある。坪井が調査した山城木津惣墓は郷（五ヶ村）で共同で管理しているが、本研究の分析に用いた他の墓地、即ち、木津町の鹿背山大墓と梅谷心樂寺裏墓地、加茂町の觀音寺地蔵院裏墓地、山城町の東平尾墓地は村毎の共同墓地である⁽²⁾。

次に南山城で使用される墓標について、墓標型式と石材の観点から述べる。木津郷の墓標を型式学的に分類するにあたり、先行研究である坪井良平の徹底した分類は注目に価する（坪井一九三九）。ここでは、坪井の分類を参考しながら作成した拙稿の分類（朽木一九九六）を用いた。以下、本稿に関係する主要な墓標型式のみ略述する。まず「A型」とするのは外形が舟形光背状を呈し、裏面は荒削りのまま加工・調整されていないものである。「B型」は方柱形で頭部が孤状を呈し、C型に比べ奥行きに欠け側面が平たく調整されている。先行するA型（仏像が彫刻されているA4型を除く）が近畿特有の墓標型式であつたのに対し、このB型は初めて全国的な齊一性をもつとされている（谷川一九八八）。「C型」は角柱形のものである。「F型」は自然石をそのまま用いたものである。後で詳述するが、東平尾墓地で主体的

墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動

一六五（五九七）

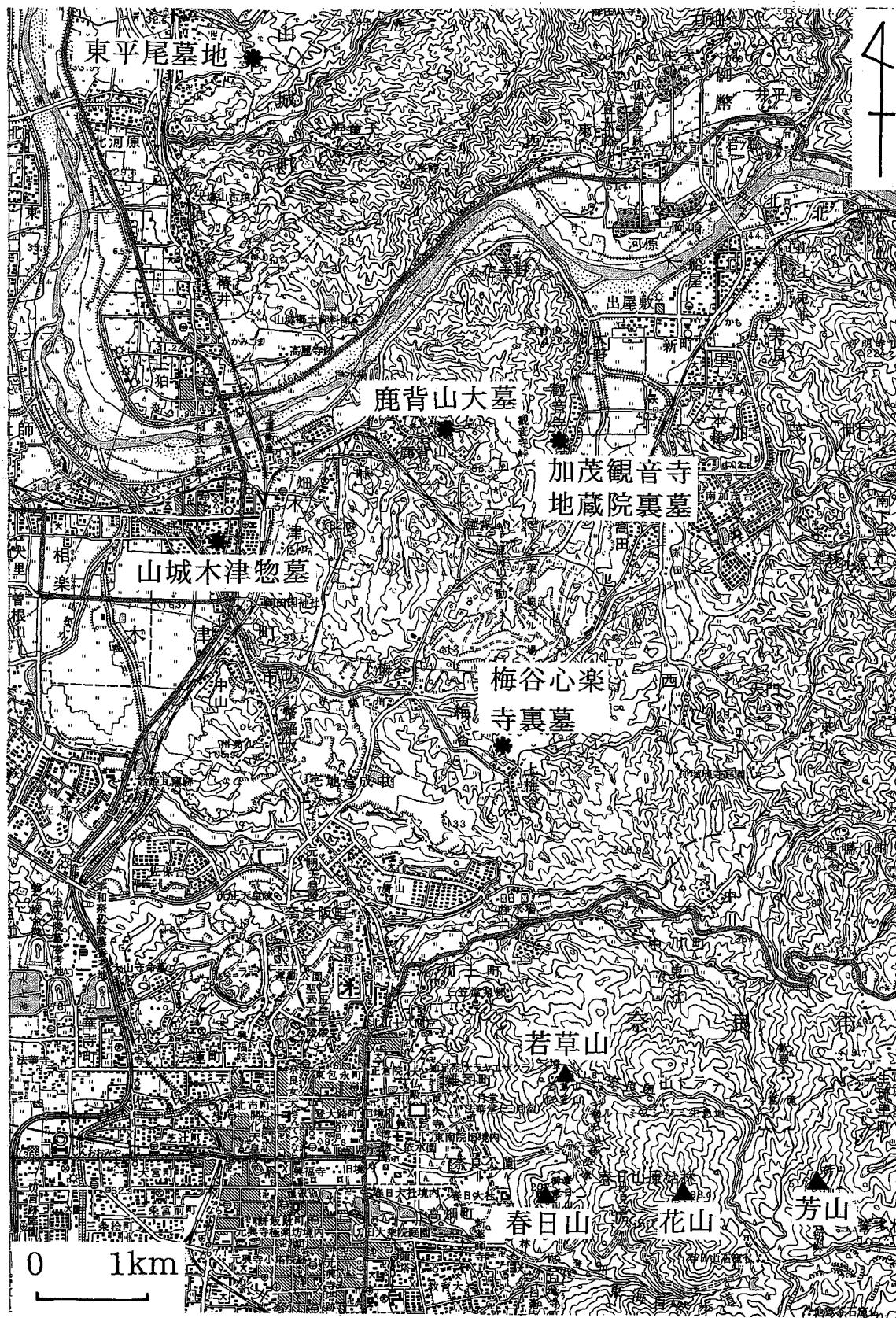


図1 春日山周辺と分析対象した墓地の位置

(国土地理院 1 : 5万地形図奈良を改変)

に認められるF型は材質不定の円礎が大半を占める。このうち、A型は「五輪塔」の彫刻があるもの、線刻による額縁があるもの、額縁のないもの、仏像が彫刻されているものの四つに細分され、それぞれA1型、A2型、A3型、A4型として分類した。他の型式も細分できるが、A型の細分型式のようにそれぞれの細分型式が個別の変遷をとげるほど大量に出現することはないので一括して取り扱う。

石材の分類は、花崗岩、安山岩、砂岩の三種を中心に行つた。但し、墓標が現在も祭祀・供養の対象となつているため、岩質同定のための岩石剝片を作成するなど、岩石学的な分類は不可能であり、現場において肉眼による同定を行つたため産地の正確な比定には限界がある。特に花崗岩は肉眼での産地比定が困難であるが、木津・加茂一帯は「領家帶」と呼ばれる花崗岩地帯に属しており、木津から約4km上流の加茂町には花崗岩の石切場があるため、花崗岩の多くが地元産の石材であることが想定できる。本稿で中心的に取り扱う鉄石（カナイシ）・カナンボ石と俗称される輝石安山岩は、地元の奈良産のものであることが坪井により指摘されている（坪井一九三九）。鉄石の具体的な採石地についてはⅢ章で考察す

るが、西田史朗によると鉄石を産する三笠安山岩層は中新世中期の室生層群ソノハ累層に分類され「若草山・御蓋山の西斜面を広く被うほか、飯盛山・十国台・花山の頂上などに点々と分布する」（西田一九八一）。砂岩は「和泉石」と呼ばれる和泉層群に属す青灰色の砂岩で、近世には墓標用石材として広く流通しており、木津においても木津川水運により大量に搬入されていたことは既に拙稿で指摘した通りである（朽木一九九四）。

(2) 木津郷周辺の墓標から見た鉄石使用の地域的傾向
本稿では先述の木津郷周辺の五墓地の近世墓標を石材・墓標型式という二つの観点から取り扱い、そこに認められる地域的傾向を指摘する。この二つの観点を取り上げた理由は、①戒名など他の属性に比べて石工の墓標製作活動と最も関連していると考えられること、②類型化が容易なため統計処理による全体像の把握が可能であることとの二点による。

まず、五墓地において使用された石材がどのように変遷したかを見るため単位期間（10年）ごとの石材比率を示すグラフを作成した（図2）。これによれば、坪井が調査した山城木津惣墓では、A1型からA2型・A3型そしてB型へと変化する様子が分かる。A1型は一七〇

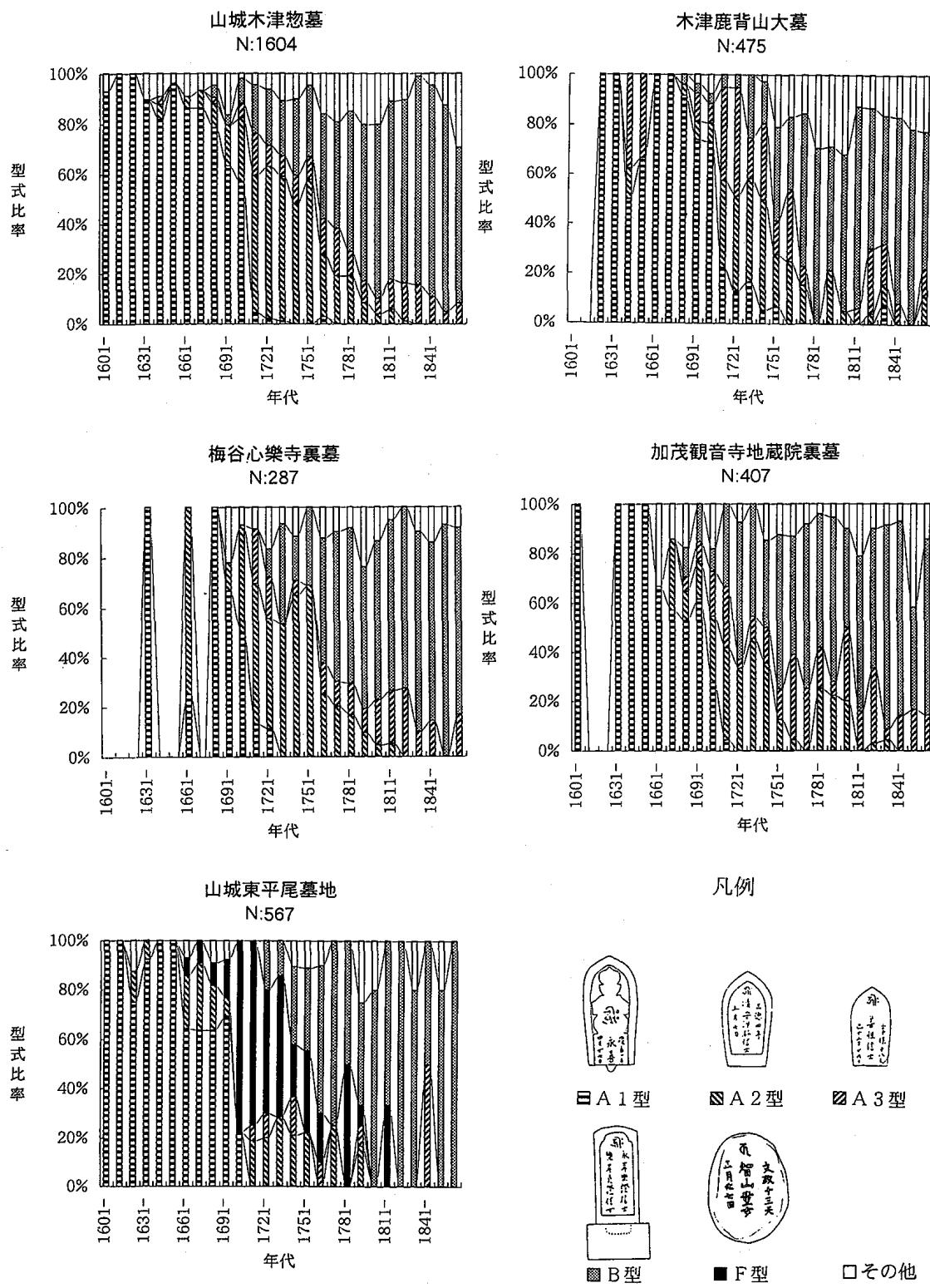


図2 南山城の各墓地における墓標型式の変遷

○年代から急激に減少し、A 2型は一六四〇年代に出現しA 1型と入れ代わって一七〇〇年代にピークを迎える。一六八〇年代に出現したB型はその後A 2型と入れ替わる形で盛行する。木津町の鹿背山大墓でも山城木津惣墓と同様にA 1型からA 2型・A 3型そしてB型への変化がたどれる。A 1型は山城木津惣墓に少し遅れて一七一〇年代から急激に減少するが、A 2・A 3型は山城木津惣墓と同様一六四〇年代に出現しA 1型と入れ代わる。

B型は一六八〇年代に出現し、その後A 2・A 3型に入れ替わって盛行する。同じく木津町梅谷の心樂寺でもA 1型からA 2型・A 3型そしてB型へと変化する。A 1型は鹿背山大墓と同様一七一〇年代から急激に減少する。A 2・A 3型は一六九〇年代に出現しA 1型と入れ代わる。B型は一七二〇年代になりようやく出現し、その後一七六〇年代になりやつとA 2型・F型に入れ替わって盛行しはじめる。

これら五墓地の比較を通して特に注目したいのは、A 1型の墓標である。A 1型墓標は十八世紀前半で消滅している。さらに、一般に、他の墓標型式は下火になつて以降も細々と墓標型式が存続するのに対し、A 1型墓標は急激に断絶している。これまでの研究ではA 1型→A 2型→A 3型というスムーズな移行が考えられてきた（坪井一九三九、三好一九九〇等）。しかし、A 1型→A 2型に見られる急激な変化とA 2型→A 3型の漸移的な変化の間には単に塔形の形骸化だけでは論じられない何らかの質的違いがあるのではないだろうか。また、A 1型に続くA 2、A 3型とF型の墓標の動向も注目に値する。F型の隆盛は山城町の東平尾墓地においてのみ認められ、他の墓地ではA 2、A 3型を用いている。悉皆調

査は未調査だが、管見の限り、東平尾墓地と木津惣墓との間に位置する椿井墓地では若干量のF型墓標が見られ、その南の上狛墓地や東平尾墓地から見て木津川対岸やや下流に位置する京田辺市飯岡墓地ではF型があまりみられないことからF型墓標が隆盛した範囲はそう広くないと考えられる。

したがつて、奈良を中心とする広い地域に分布したA1型の急激な衰退により、型式分布圏に空白が生じ、それを引き継ぐ型式が地域によって異なつたものであつたため、このような型式変遷の地域的差異を生んだと考えられる。

次に、墓標に使用された石材の変遷について図3を見れば、本稿で注目している鉄石が、各墓地に於て同じような消長をたどっている。即ち、鉄石の使用は十七世紀に集中しており、十八世紀初頭には急激に減少し、一七五〇年頃を境に途絶していることが分かる。さらに、鉄石消滅後の動向は、墓地毎に異なつたパターンを示してお

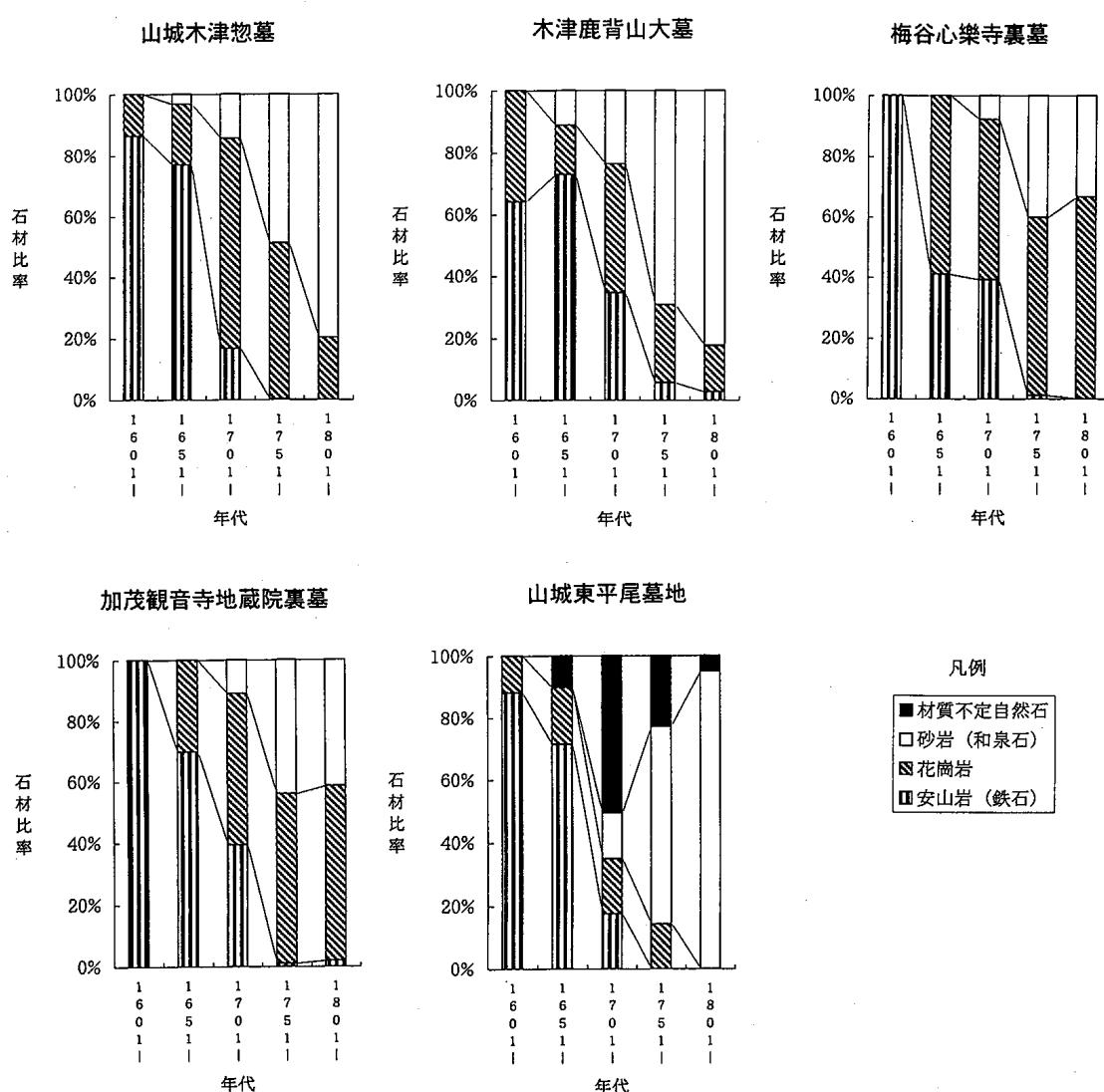


図3 南山城の各墓地における墓標石材の変遷

り、山城木津惣墓と鹿背山大墓、梅谷心樂寺裏墓と加茂觀音寺地蔵院墓、山城町東平尾墓地の三群に大別するこ^トが可能である。即ち、輝石安山岩から花崗岩、そして砂岩へとスムーズに移行するグループと、砂岩の使用がふるわざ花崗岩の使用が長引くグループ、花崗岩に平行して材質不定の円礫を使用するグループに分けられる。したがつて、墓標型式における指摘と同様に、奈良を中心^に広く普及した鉄石の急激な衰退による石材分布圏の

空白をうめる形で引き継がれた各石材の分布圏は、鉄石のそれに匹敵するような広範囲にわたるものではなく、図3において認められた三つのパターンに見られるよう^な、比較的小規模な地域的差異を持つものであつたことが指摘できる。

また、表1-1-5は各墓地における石材と墓標型式の関係を示すクロス集計表であるが、これらの表から、若干の地域的差異は有るもの、A1型は鉄石、A2、A3型は花崗岩、B型は砂岩といった形での緩やかな関係性が看取できる。さらに、石材と墓標型式の関係に地域的差異が認められるのは、前述の石材について指摘した三つのグループが出現した十八世紀後半以降の状況が影響したためと考えられる。したがつて、十七世紀の主

要型式であるA1型墓標については、多くが鉄石を用いて製作されており、この点では、各墓地で一致した傾向を示している。このことは、既に先行研究によつても指摘されている（坪井一九三九、木下一九七七）。したがつて、先に指摘したような、十七世紀後半から十八世紀初頭におけるA1型の墓標型式の急激な衰退と鉄石製墓標の消滅が、南山城地域においては相互に深く関連している可能性も考えられる。

以上の考古学的分析から、①近世前期の主要な石材である鉄石の使用は十七世紀に集中しており、十八世紀初頭には急激減少し、一七五〇年代頃に一斉消滅すること、②鉄石と同様にA1型墓標も十八世紀前半で途絶していること③A1型に続く型式の出現には地域差があり、木津郷周辺ではA2、A3型が用いられるものの、東平尾ではF型が用いられており、半径五キロ程度の比較的狭い範囲においても地域差が認められること、④鉄石の消滅に続いて使用された石材についても、輝石安山岩から花崗岩、そして砂岩へとスムーズに移行するグループ（山城木津惣墓及び鹿背山大墓）と、砂岩の使用がふるわざ花崗岩の使用が長引くグループ（梅谷心樂寺裏墓及び加茂觀音寺地蔵院墓）、花崗岩に平行するかたちで使

表1-1 山城木津惣墓における主要型式／石材クロス集計表

	A1型	A2・A3型	B型
安山岩（鉄石）	335	37	3
花崗岩	92	512	234
砂岩（和泉石）	7	91	583

表1-2 木津鹿背山大墓における主要型式／石材クロス集計表

	A1型	A2・A3型	B型
安山岩（鉄石）	87	30	1
花崗岩	5	76	23
砂岩（和泉石）	14	47	132

表1-3 梅谷心樂寺裏墓における主要型式／石材クロス集計表

	A1型	A2・A3型	B型
安山岩（鉄石）	24	36	4
花崗岩	19	139	90
砂岩（和泉石）	0	9	74

表1-4 加茂觀音寺地蔵院裏墓における主要型式／石材クロス集計表

	A1型	A2・A3型	B型
安山岩（鉄石）	38	41	11
花崗岩	9	126	118
砂岩（和泉石）	0	17	88

表1-5 山城東平尾墓地における主要型式／石材クロス集計表

	A1型	A2・A3型	B型	F型
安山岩（鉄石）	121	13	0	0
花崗岩	61	63	21	3
砂岩（和泉石）	0	18	135	0
材質不定自然石	0	0	0	86

用される材質不定の円礫が一時期主体を占めて使用されるグループ（山城町東平尾墓地）にわけられることの四点が指摘できた。

また、鉄石及びA1型の急激な衰退という現象は木津に留まるだけでなく、奈良町中の元興寺極楽坊においても同様に認められる（木下一九七七）。したがつて、鉄

石製墓標の一斉消滅は木津郷周辺という一地域に限定された内部的要因によるものではなく、鉄石を用いて墓標を作成するという活動自体の消滅を意味すると考えられる。さらに、奈良盆地北半部から南山城という広大な流通圏を持つ鉄石を用いての石造物生産活動の衰退は、石材の受け手である南山城での石材分布圏、墓標型式分布圏のあり方に大きな影響を与え、鉄石消滅以後の各分布圏は半径五キロといった比較的狭い隣村程度の範囲でも地域差が認められるような状況を引き起こしたと考えられる。この点について本稿では、鉄石製A1型墓標が顯著である南山城地域での指摘に留まつたが、鉄石の消滅が他地域でも同様に認められるのかについて、鉄石以外の石材のA1型墓標も認められる天理市周辺など、木津以外の奈良周辺地域での考証が望まれる。さて、次章では、鉄石使用鉄石製墓標の減少が始まる十七世紀後半と

この墓標が完全に消滅する一七五〇年代という墓標の考古学的分析で明かとなつた二つの時期を念頭において、採石地の歴史的背景を踏まえつつ鉄石の採石活動の実態をさらに詳しく検討したい。

III 鉄石採石の歴史的背景

まず、鉄石の採石地については、鉄石の採石がなされていた時期と同時期の正徳三（一七一三）年に、村井古道によつて書かれた『南都名産文集』の「岩渕石并鉄石」の項で明かとなる。

岩渕石并鉄石カナイシ

（略）又高円芳山の幽谷に玄石を出す、ひとへに鋼
鐵の色に似たり、依てかな石と称す、盤に磨けば百
工に助あり、礎甃に用て冷湿を含まず、剛なる事ハ
鉄に類ひし、然も石工が鑿に倦す、又隣国に累もな
く碑に刻ミ、雨露をふれて苔をむすはす、万に叶う
鉄石の金にまさる益ありとハ、此たくひをもいふな
るへし

花鳥に角菱とれて石の肌

（句読点は筆者、以下同じ）

これによると、鉄石は芳山において採石されていたこと

が分かる（図1）。西田史朗の論考（西田一九八二）に基づくと、地質学的にみて、芳山において鉄石（輝石安山岩）が採取できるとは考えにくいが、当時花山と芳山があまり区別されていなかつたことを示唆する記述もあることを考えると、花山頂上に三笠安山岩層が存在するという西田の指摘と合致する。例えば、幕末の奈良奉行川路聖謨の日記『寧府紀事』弘化四（一八四七）年正月廿一日条が花山と芳山を同一視していたことの一例である。

ならに芳山といふ所あり、はな山とよむ也、春日山つゝきにて、うくひすの瀧のある所也、はな山といふ故、僧正遍昭か居しはな山にも似たり、この頃よくみれば興福寺の衆徒六方かたの支配山にて、いにしへは方山といひしに、サを加へて芳山と成、それを一轉してはな山とよむ也、江戸の新堀をにつぼりとよみ、日暮里と字をかえ、ひくらしとよむ類にて、文華ひらけたるよりの偽也、名所古跡に多ことなるへし

花山と芳山が一括して支配されることが多かつたため生じた過誤であろうと考えられる。⁽³⁾ここでは、以上の点をふまえ、鉄石が広く春日裏山（花山及び芳山を中心とす

る地域）周辺で採石されたとして議論をすすめていく。ただし、春日裏山における鉄石採石に関しては、管見の限り、その活動の衰退原因を直接に記述した文献史料は存在しない。採石地に比定される地域の周辺の管理形態を考察することによつて、採石活動の歴史的背景について検討を加えたい。

春日裏山、とくに芳山は興福寺六方衆の支配山であつたが、その後、近世初頭に幕府領として奈良奉行の管轄下になつた山である。芳山が公儀山になつた経緯は、奈良奉行所与力が記した玉井家文書『廳中漫録』二五 廳上に、次のように記されている。

一、芳山ノ事、根元ハ興福寺六方中支配ノ山ナリ、
昔ハ興福寺ノ四隅ニ風呂屋ヲ建置テ、室住居ノ大衆
來リ、又ハ食堂ニテ大衆ノ食物ヲ調トキノ是又薪ナ
リ、ソレヲ六方中支配ス、干時東金堂預リ、愛染院
西金堂預リ、正法院ノ支配トナリ取分正法院執行ス、
年經テ正法院ノ持山ノ様ニナリ、我僕ニ致シ來リタ
リ、一乘院殿尊勢ノ御時ニ至リ、六方中支配トイヘ
ハ興福寺ノ山ナリ、ソレヲ無故正法院我儘ニ支配ハ
如何ト御不審ノ上、中坊飛驒守時ニ一乘院殿ト正法

院双方公事ニナリ、終ニ公儀山トナリ、南都奉行人ノ支配ニ被仰付ナリ、芳山ノ芳ノ字誤リナリ、六方中ノ支配ナル故ニ、六方ノ方ノ字ヲカタドリ方山ト云、故ニ方ノ文字ヨシ、(中略) 方山ノ形異隅ヨリ乾隅へ長シ、東西九町南北十七町

この史料により、中坊飛騨守の時の公事がもとで公儀山

となつたことが分かる。榎田善雄の研究によると、中坊

飛騨守秀政は慶長十四(一六〇九)年に春日造営奉行を

父から継職し、慶長十八(一六一三)年の大久保長安の

死を契機に公式に初代奈良奉行に起用されている(榎田

一九八〇)。近世初頭に中坊飛騨守によつて収公された

芳山は、以後歴代奈良奉行により管理經營されるが、其

の方法は下刈札を発給し、許可されたものが入山すると

いうものであった。玉井家文書『廳中漫録』二四 南都

町中可令觸知條々によると、中坊飛騨守、中坊美作守、土屋忠次郎、溝口豊前守らによつて「奈良廻り八箇村」

(法蓮・京終・杉町・芝辻・城戸・油坂・川上・野田・北市)に都合二十七枚(内山廻札一枚、町代札一枚)の

芳山札が交付されている。また、土屋忠次郎の時には与力八人に八枚、同心二十五人に五枚の芳山下刈札が与えられている。また、隣接する花山については春日社御供

所、同社安居屋参籠僧、興福寺東西金堂に花山下刈札、檜札などが奈良奉行から発行されており、芳山同様の管理がなされていたと考えられる。この点について、奈良与力橋本家文書『山方心鏡記』にも焼印札之覚として次のように書かれている。

焼印札之覚

東大寺法花堂

裏 花山櫛札

享和元年 四月より七月迄

裏 加賀焼印

西十月日

右壹枚ハ執行之節斗相渡ス、

安居屋薪壹荷

表 花山札

四月十一日ヨリ百ヶ日ノ間

享和元年

裏 加賀焼印

西十月日

安居屋

表 花山檣札

四月十一日ヨリ百ヶ日ノ間

享和元年
裏 加賀焼印

西十月日

右弐枚ハ毎年夏中相渡ス、

西金堂
表 花山檣札

享和元年
裏 加賀焼印

西十月日

東金堂

表 花山檣札

墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動

享和元年
裏 加賀焼印

西十月日

毎日壱荷宛
表 花山枯枝札

享和元年

裏 加賀焼印

西十月日

右三枚ハ興福寺兩堂當行執行之節入用、

御供所一日弐荷宛
表 花山下枝 枯枝 下刈札
三枚之内西庄民之助

享和元年

裏 加賀焼印

西十月日

二七五 (六〇七)

西大寺	油坂村三枚
下茹札	川上村壹枚
拾枚之内	野田村壹枚
享和元年	北市村貳枚
裏加賀焼印	芝辻村三枚
酉十月日	以上貳拾五枚、
下茹壹日壹荷宛	一、与力札 七枚
表芳山札	一、同心札 九枚
何枚之内	一、山廻札 貳枚
享和元年	一、下屋敷門出入札 六枚
裏加賀焼印	(以下略)
酉十月日	とある。これによると、札の給付対象、採取する品目、採取時期毎に細かく区別して札を給していることがわかる。奈良奉行所による春日裏山の管理が具体的かつ詳細にわたるものであつた様子が分かる。
法蓮札四枚	さらに、『廳中漫録』一二四 南都町中可令觸知條々によると、花山・芳山に以下の制札が出されており、年代不明ではあるが、溝口豊前守によるものといわれている。
京終村三枚	一、花山芳山における相定札之外、下草に至まで一
杉ヶ町村三枚	切不可剪採事
城戸村五枚	一、是より奥へ差戻之外、猥不可出入事

一、殺生かたく令停止之事

右之條々相背輩於有之者、可為曲事者也

正月日

また、奈良与力橋本家文書『山方心鏡記』には

一、花山芳山制札写

條々

一、花山芳山にをひて相定札之外、下草に至るまで
一切不可剪採事

一、是より奥江差図之外、猥不可出入事

一、殺生堅令停止之事

右之條々相背輩於有之者、可為曲事者也

享保十一年十月十五日

奉行

右同文言二而武枚内壹枚ハ芳山南入口ニ建、壹枚ハ
花山北入口ニ建、右高札之儀、貞享二丑年十一月大
岡弥右衛門南都奉行之節より建置候得共、奉行代り
度每ニ書改不申、不時ニ而も損シ候節ハ書改候、當
時建置候者、細井因幡守南都奉行之節、享保十一年
牧野佐渡守殿江相伺候上、同年十月十五日書改候
ニ付、當時高札右之年月ニ御座候

とあり、貞享二（一六八五）年十月に花山と芳山に高札

墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動

が建てられたとしている。このほか、溝口豊前守が与力
中に交代で山廻りをする旨を通達した覚書も『廳中漫
録』⁽⁴⁾二四南都町中可令觸知條々に掲載されており、溝口
豊前守・大岡弥右衛門が奈良奉行であつた一六七〇年代
から一六八〇年代の頃に春日裏山の管理体制が確立・強
化されたといえる。幕府による春日裏山の管理がしだい
に確立し自由な往来が抑制されたことと、中世末以来の
墓標における鉄石利用が減少する時期と一致する。

さらに、実際の春日裏山の管理に配置されていた人員
については、奈良与力橋本家文書『与力同心其外之者人
数并役掛書付』に詳しい。天保十一（一八四〇）年八月
改めの段階で、花山芳山多門山方の与力として羽田半之
助、中條仁之助、中條源吾、橋本直次郎、玉井萬七郎の
五名（与力一人中、見習含む）が、同心として池田文
治、堀川官蔵、松田絹八郎、青木紋三郎、堀川堤作、小
片源十郎の六名（同心四二人中、見習含む）が挙げられ
ている。大半が兼職しているが、天保期の段階で見る限
り、奈良奉行所の役務として春日裏山の管理は少なから
ぬ位置を占めていたと考えられる。

また、幕末の奈良奉行川路聖謨は、日記『寧府紀事』
嘉永二（一八四九）年閏四月五日の記事で以下のように

述べている。

先達而与力同心共出精に付、御林山を伐取候而御手當之義相伺候處、伺之通御差図有之候に付、山を伐取候而与力共其外江差遣候積也、この山といふは、むかし欠所に成たる山也、廿万坪ほどあり、宝曆迄は与力同心其外迄同所に而薪取たるところ、追々に

伐つくしてはけ山に成たる故に、宝曆の頃より公儀へ返上したる也、しかるにつしかと百年はかり之内に、自然に立派なる山に成たるに付、元来与力同心共之品も同しこと也、しかるに今度五寸廻り以下之木を伐取候而売払たれ共、百両余に成也、大和のもの、山を家督のことくに百姓共之するも尤也と此節おもふ也、御改正に而諸運上やみ、御役所之諸賄差支候處、右に続たるよき御林有之、三千両ほどに売払候而、御かし附にいたし候積に相成、伐木に取りかゝり候積之處、与力羽田健左衛門といふもの考に而、商人江は不売、奉行所に而世話をやき、少々宛切売にいたし候積に相成、追々其通取計候處、三分二伐取候而見込通之御金出来、其外に後年永代御林之手入、御貸附も出来て最上なる所、三分一のこりたり、これ丈は全く与力之骨折也、大造なること

也、奉行所之明き地馬場のはし迄江、杉桧之苗木を植附て日々百姓共來り、くさを取手入をすること畠のことし、健左衛門七十四五歳までも存生なれば、御はやしは壹万両はかりの山に後年にはいたるへし、凡而大和のもの、地力をいたづらにせぬこと、関東とは大にこと也

これによると、以前に欠所になつて御林山となつていた山が与力同心その他によつて利用されており、宝曆（一七五一～六三）頃に公儀に返上され、川路聖謨が伐木するまで放置されていたことが分かる。『奈良公園史』によると、この御林はもと欠所山で、なおかつ「奉行所役人の柴刈山だ」というと芳山に似つかわしい」としている（奈良公園史編集委員会一九八二）。この解釈に依拠した上で、かつ宝曆（一七五一～六三）頃に御林を与力同心が返上していることに注目したい。公儀への返上とは、下刈札等の鑑札返上を意味すると考えられることから、以後の春日裏山への立入はそれまで以上に制限されたと思われる。鉄石製墓標が一齊消滅する時期と、芳山と思われる公儀山が公儀へ返上された時期が符合する。鉄石についての記述がないため確証はないが、鉄石採取が下火になる原因としてこの入山制限が影響した可能性が考

えられる。

以上のように、春日裏山一帯は中世末から近世にかけて管理体制がしだいに確立し、自由な往来が抑制されていったと考えられる。このような歴史的背景の中で、鉄石採石活動は制限され下火になり、鉄石製墓標の生産も少なくなつていったことが推察される。その一方、これに入れ替わる形で、春日大社の花崗岩製石燈籠を製作するような堅石加工技術を持つ、店持ちの和泉系石工が出現する。また宝永元（一七〇四）年の新大和川の川換え以降、大坂で製作された石造物が大和に流入してくることも指摘されている（奈良文化財同好会一九八七）。春

日山一帯での鉄石採石活動および鉄石製墓標の生産は、鉄石入手が困難になつたことが直接的な契機となつた上で上述のような代替となる諸要素が影響し、衰退が決定的となつたのではないだろうか。

結語

本稿では、南山城周辺の墓標を大量かつ全体的に扱うことにより、以下のことが考古学的分析から明らかとなつた。

①中世末から近世前期にかけて、舟形光背形に五輪

塔を浮彫したA1型墓標が大量に製作され、近世

中期には一斉に消滅するという南山城では一致した地域的傾向があること。

②さらに、鉄石も中世末から近世前期にかけて、墓標製作に大量に使用され、近世中期には一斉に消滅するという南山城では一致した地域的傾向があること。

③奈良盆地北半部から南山城という広大な流通圏を持つ鉄石を用いての石造物生産活動の衰退は、南山城での石材分布圏、墓標型式分布圏のあり方に大きな影響を与え、鉄石消滅以後の石材と墓標型式の分布圏は半径五キロといった比較的狭い隣村程度の範囲でも地域差が認められること。

④こうした鉄石とA1型墓標の急激な衰退の背景として、木津周辺の地域的な原因ではなく、春日裏山における鉄石採石活動 자체の衰退が考えられること。

さらに、鉄石採石推定地（春日裏山）についての文献史料を参照しながら検討した結果、奈良奉行による春日裏山の管理体制の確立に伴つて鉄石採石活動が衰退していった可能性を示唆した。

このように、墓標は、紀年銘を持つ資料が量的に限られる他の石造物と異なり、造立された数量を年代毎に計測することができる。そのため、墓標には、採石活動を始めとする石造物生産活動の実態が、文献史料とは異なる形で年代毎且つ量的に記録されている。つまり、今まで漠然と論じられてきた近世前期における石工の活動を浮き彫りにするうえでは、墓標という物質資料からみた採石活動の消長と石造物生産活動の具体的な動態に基づいて考察することが重要である。さらに、管見の限りにおいて鉄石採石に関して直接に記述した文献史料が存在しないため、あくまで可能性の示唆に留まつたが、近世期における奈良周辺の山野及びその管理体制や、奈良の石工についての文献史学の側からの研究の進展により、鉄石採石活動がより明かとなることに期待したい。

謝辞

本稿は、一九九八年度慶應義塾大学大学院高度化推進研究費補助金による調査成果に基づいている。また、一九九九年度以降については、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）及び日本学術振興会特別研究員制度に基づく研究助成による成果の一部を含んでいる。本稿作

成にあたつて慶應義塾大学の鈴木公雄先生には日頃より全般にわたるご指導を、古文書の解読などについては慶應義塾大学の田代和生先生のご教示を賜わった。また、本稿の基礎的な部分については、国立歴史民俗博物館基幹研究の研究会で発表する機会を得た。その席上、白石太一郎、新谷尚紀、今尾文昭、幡鎌一弘、設楽博己、千葉田嘉博、村木一郎、吉澤悟、朴澤直秀、関口慶久、千葉佳奈子の各氏から有益な御指摘を受けた。また、桜井準也・松田隆行・磯田道史・田原昇・西岡芳晴・八田達男・岩淵令治の諸氏にもご指摘を受けた。また、墓標調査を行なつた各寺院の方々及び寺院を紹介していただきた木津町・加茂町・山城町の各教育委員会の方々には調査協力を快諾していただいた。末筆ながら記して深く御礼申し上げる次第である。

註

(1) 『多聞院日記』天正十五（一五八七）年八月十日条に

「十日、水屋川ノ大石郡山へ取由、車アマタ上了」とある。

また、『奈良坊目拙解』では鍋屋町の項で、別称として「石屋町、或いは石切町」の名を挙げ、由緒として「石工数家この町に居た」ことを挙げている。

(2) 山城木津惣墓は坪井一九三九のデータに、鹿背山大

墓・梅谷心楽寺裏墓・加茂觀音寺地蔵院墓のデータはそ

れぞれ朽木一九九四、朽木一九九六のデータに依拠して
いる。なお、山城東平尾墓地のデータは朽木一九九九に

於いて一部公開した。また、同墓地は広大であるため、
北地区の521基のみ調査を行つた。

(3) 他に、『南都名産文集』にも芳山と花山を区別してい
なかつた記述が見られる。

(4) 『廳中漫録』二四 南都町中可令觸知條々にある己六
月日の記載のある溝口豊前守から与力中に宛てた覚書には「一、与力中山廻候儀、如前々替々廻可申候」とあり、
巳の干支から延宝五(二六七〇)年と推測される。

参考文献

天岸正男一九八五「石材の徵發「禁制」史料」『歴史考古学』

秋池 武一九八九「近世近代牛伏砂岩の利用について—牛伏
砂岩製墓標—」『東国史論』四

遠藤元男一九八五『近世職人の世界』雄山閣出版

奥田尚編一九八三『大和郡山城天守台石垣岩石種調査報告
書』郡山城史跡・柳沢文庫保存会

金森敦子一九七八「旅をする石工たち」『日本の石仏』⁵

金森敦子一九八〇「和泉石工—近世における移住についての
一考察—」『日本の石仏』¹⁴

金森敦子一九八二「職人の世界—石工の場合」『民俗学評論』

22 萱野章宏一九九七「袖ヶ浦の近世石工」『袖ヶ浦市史研究』

5

北原通男一九九五「高遠石工の旅稼ぎとその作品」『高遠の
石仏』所収

木下密運一九六七「元興寺極樂坊板碑群の調査研究」『元興
寺佛教民俗資料研究所年報』元興寺佛教民俗資料研究所
所収

木下密運一九七七「石塔類」『日本佛教民俗基礎資料集成第
四卷元興寺極樂坊IV』所収

木村 博一九七六「近世における石工集団—「高遠石工」を
めぐって—」『日本民俗学』¹⁰⁴

朽木 量一九九四「近世墓標の形態変化と石材流通」『民族
考古』²

朽木 量一九九六「近世墓標とその地域的・社会的背景」
『史学』⁶⁶⁻¹

朽木 量一九九九「近世墓標研究におけるプラチック考古学
の試み」『メタ・アーケオロジー』創刊号

島 亨一九七八「巻頭言—石工研究の周辺」『日本の石仏』⁸

杣田善雄一九八〇「幕藩制成立期の奈良奉行」『日本史研究』²¹²

曾根原駿吉郎一九六九『貞治の石仏』講談社

大護八郎一九七八「石工研究への私見」『日本の石仏』⁸

谷川章雄一九八八「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』²⁸⁸

坪井良平一九三九「山城木津物墓墓標の研究」『考古学』¹⁰

3

墓標の考古学的分析からみた近世前期の採石活動

二八一 (六一三)

- 仲 芳人一九八八「石工「石切峠 庄次郎」銘を追つて」
『歴史考古学』21
- 仲 芳人一九八九a「近世大和石工の早期資料——石工文四郎と石工中辻町善四郎——」『史迹と美術』593
- 仲 芳人一九八九b「近世大和石工和泉屋権兵衛について」
『歴史考古学』23
- 仲 芳人一九九〇a「続近世大和石工の早期資料——石工東向中町佐次兵衛——」『史迹と美術』606
- 仲 芳人一九九〇b「奈良市東寺林町・西寺林町と近世奈良石工資料」『歴史考古学』26
- 仲 芳人一九九六「南都石工歎樂」について」『史迹と美術』664
- 奈良公園史編集委員会一九八二「奈良公園史」奈良県
奈良文化財同好会一九八七「狛犬の研究」奈良文化財同好会
狛犬の会
- 西川武臣一九九三「江戸内湾の漆と流通」岩田書院
- 西田史朗一九八二「第2章地学1地質・地史」『奈良公園史』
自然編 所収
- 三好義三一九八六「近世墓標の形態と民衆の精神の変化について」『立正大学大学院年報』³
- 三好義三一九九〇「近世墓標」『歴史考古学の問題点』近藤出版社所収
- 柳田国男一九六三「明治大正史世相篇」『定本柳田国男集24』筑摩書房所収

史料

川路聖謨『寧府紀事』(藤井甚太郎編一九三三・三四『川路聖謨文書第二一・五』日本史籍協会に翻刻所収)

玉井家文書『廳中漫録』(奈良県立奈良図書館所蔵マイクロフィルム影印、一九六九年撮影)

多聞院英俊『多聞院日記』(辻善之助編一九六七『多聞院日記』第四卷角川書店に翻刻所収)

橋本家文書『与力同心其外之者人数并役掛書付』(京都大学図書館所蔵マイクロフィルム影印)

橋本家文書『山方心鏡記』(京都大学図書館所蔵マイクロフィルム影印)

村井古道『南都名産文集』(喜多野徳俊訳一九七九『南都年中行事』総芸舎に翻刻所収)

村井古道『奈良坊目拙解』(喜多野徳俊訳一九七七『奈良坊目拙解』総芸舎に翻刻所収)